



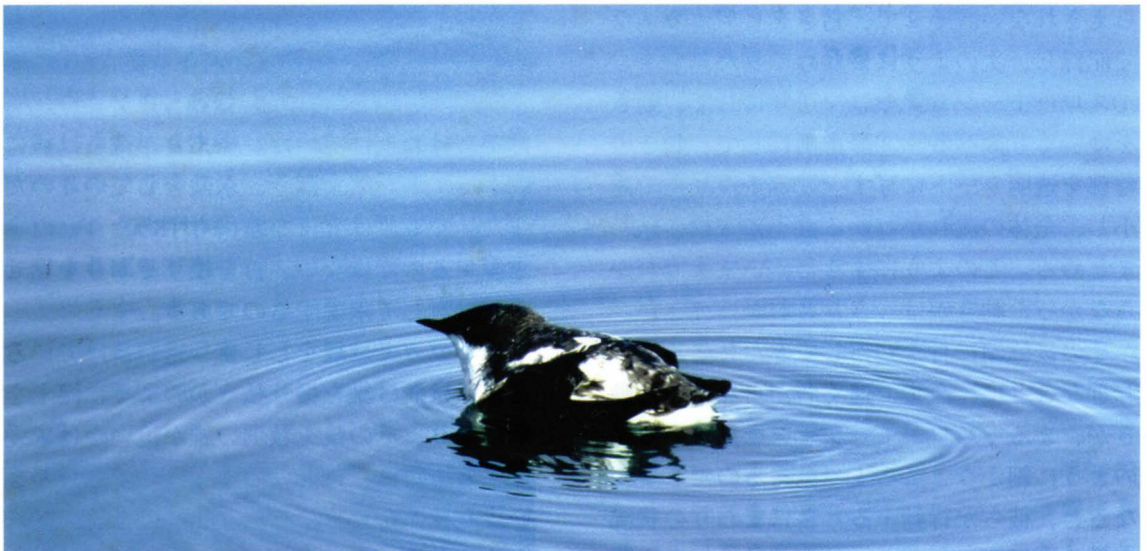
No.55

2003年3月発行

# 新潟県支部報

マイ スコープ

## 珍鳥飛来 ②



マダラウミスズメ 2001年1月 直江津港 撮影 上越市 古川 弘



マダラウミスズメ 2003年1月 直江津港  
撮影 上越市 古川 弘



サシカノゴイ 2003年2月 大潟町鶴ノ池  
撮影 上越市 曾我茂樹

# カモたちの求愛行動

新潟市 小池重人

太陽が顔を見せた冬の午後、瓢湖でのんびり泳ぐコガモたちを観察していた。雄のきれいな羽毛が光を受けて輝く。突然、雄たちがふしぎな動きを始めた。体を立てたり首と尾を上げたり、すばやい動作だ。コガモの雄たちは何のためにこのような動きをしているのだろうか。詳しく観察してみることにした。ただあまりにも動きが早く、細かな動きがとらえきれない。そこで、動きをビデオカメラで記録し、次のようにまとめてみた。

①スローモーションやコマ送りにして、動きをゆっくり調べる。②静止画にして、動きの輪郭を透明シートに写す。③電子コピーで縮小し、全体の流れがわかるように一枚の紙にまとめる。このようにすると、いままでわからなかった動きがはっきりとわかってきた。

その後瓢湖に行き観察してみたところ、ふしぎなことに、今まで速くわからなかった動きが、まるでスローモーションを見ているかのように細かなところまで見えるのだ。こうなると、彼らが行動するときまわりの状況を見る余裕がでてきた。最も普通に行なう行動は水はね行動だ。始めてから終わるまで2秒かかる。よく見ると、雄たちは水を雌を向



けて、はね上げていた。つまり、彼らは雌に向かってダンスを踊り、求愛をしているのだった。でも雄はどんな雌にも手あたりしだい求愛するのではない。首を振りそぶりを見せる雌に対して求愛するのである。

オナガガモは雌をしじゅう追いかけている。ときには雌は雄を振り払うかのように湖上を飛び回り、その後を数羽の雄が追いかけて求愛をする。雌はきっとこのようにして熱意のない雄や体力のない雄を振り払うのだ。何度か雄が求愛をしていると、雌はある雄が気に入り、しだいにその雄について行くようになる。そして、意気投合してつがいになると、2羽

はいつも一緒に過ごすようになる。やがて春が来ると彼らは一時も離れずシベリアの繁殖地へ向かうのだ。

冬の湖沼はカモたちの越冬地であり、出会いの場なのである。

## 参考文献

小池重人(1992). バードウォッチング. 新潟日報夕刊





# ハヤブサのディスプレイ

柏崎市 末崎興助

今から10数年前、私がハヤブサを初めて見てまだ間もない3月初旬の頃だった。望遠付のカメラを担いで目的地に近づくと、突然ハヤブサのペアが上空に現れて、高空より地上すれすれになるまでの広大な空間を、猛スピードで追い掛けたり、又、逆に追い掛けられたり、その目まぐるしさと迫力に圧倒されて、カメラは担いだままで全くカメラマンを忘れて、ただただディスプレイの激しさに呆然と見送るばかりでした。

この季節になると、毎年見られる光景ではあるが、いつ見ても感動を与えてくれる。ある時は近くを飛んでいたウミウが驚いて海に突っこんだり、小舟の漁師が声を発しながら身をすくめるのを目撃したこともあった。

今年の3月2日、風の強い曇り空の日であったが、悪天候でもこの季節になるとじっとしてはられない。

こうした風の強い日は、ハヤブサは岩陰で風を除けてじっとしていることが多い。そんな日の観察は無意味とは思われがちだが、いつか飛立つのを信じてひたすら待ち続けた結果、強風の中でのディスプレイを観察する機会に恵まれた。高い空から風にも乗り2羽で急降下する姿を眺めていると、これまで時速300km説に疑問を抱いていた私の考えが、一辺に間違いであったことに気付いた。

あの鋭い刃物のような翼で、風を切り進む勇姿はとても撮影不可能だが、私の脳裏からは決して消えることはないであろう。



# 燕市・分水町の鳥

燕市 松永 洸

新潟市から燕市に転勤して1年が経過した。この間、じっくりと鳥を見に出かけたことはないが、自動車で双眼鏡を乗せておいたり、仕事用に鞆に双眼鏡を忍ばせて置き、「仕事をしながら」、「自動車で移動しながら」。走りばしり見た鳥達と場所を紹介したいと思う。

## ■環境

私の勤務する燕市・分水町は、新潟県のほぼ中央部に位置し、周囲には水田地帯が広がる地域で全くの平野部である。燕市には、中之口川が西から東に流れ、燕市中心部近くには中州等もあり、アシ、マコモ、ヤナギが自生し、三条市との境界付近には、新幹線・高速道路が通り、新幹線の高架橋を繁殖場所としている鳥もいる。分水町には信濃川と大河津分水が流れ、河川敷のアシ原、水田や草地を利用する鳥も見られる。また、大河津分水下流北側には隣接して標高313.2mの国上山があり、四季それぞれに変化に富んだ環境となっている。

## ■ツバメ

燕市には、名前のとおりツバメが集中して繁殖しているところがある。それは、燕市の中心街である。3・8の市が開催されるメインストリートで、雁木（昔の雁木ではなく洋食器の町らしい雰囲気）の天井には照明設備がちょうどツバメが営巣しやすいように10cm×10cm位の台が四方についており、中央に電球が取り付けられている。ツバメはその台に営巣しており、この照明設備が各家の前に取り付けてあって、2個の照明設備に1個の割合で営巣している。中には、1個の設備に2個の巣があるところもある。個数としては相当の数になるのではないかと。今年はちょっと調べてみたいと思っている。

## ■サギ類

燕市消防本部近くの中之口川の中州には、アオサギ、ゴイサギ、コサギ、アマサギ等が集団で繁殖している。ここで繁殖しているサギ類は、近くの水田で採餌したり、中之口川の浅瀬で小魚やカエル等を餌としている。私が転勤し、市役所にあいさつに行ったところ、このサギが集団で繁殖している話になり、付近の住民から市役所に、「サギの糞で洗濯物が汚れるし干せない。駆除してもらえないか。」と苦情が寄せられており、何とか駆除する方法はないかと言われたことがあった。「かつてに駆除することはできないが、害のない別のところに移動させることを考えたらどうですか。町の真ん中でこれだけのサギ類を見れるところは新潟県ではありませんし、一年中繁殖しているわけではなく季節が変わればなくなりますよ。」と答えた記憶がある。近くには桜並木もあり、これからの季節は結構楽しめるのではないかとと思っている。



アマサギ

## ■チョウゲンボウ

この鳥は、燕市ではあまり見られない鳥であるが、廃棄物不法投棄の処置で、三条市との境界付近に行った時に確認した。その後、



新幹線のパイプの上にカラスの巣と思われる古巣を使ったのか、それとも新たに作ったのかは不明なものの、繁殖している事は2002年5月中旬ごろに確認できた。しかし、雛が巣立ったかどうかは確認できなかった。この巣の近くには、水田、信濃川の河川敷内の農耕地、アシ原、草地などがあるため、採餌場所と営巣場所としては最適の場所ではないかと思われた。このチョウゲンボウも今年の楽しみの一つである。



新幹線下のチョウゲンボウ営巣場所



## ■ノジコ

ノジコは、仕事がらみで分水町の国上山の裏側から野積に抜ける山道の脇で声を聞いた。翌週再度確認に行き、ネムノキでさえずる本種を確認した。国上山周辺では数が非常に少ない種であると思う。松代町や高柳町でノジコを見てきた私にとっては、こんなところだと思いがけない出会いであった。

## ■サンコウチョウ

サンコウチョウは、ノジコと同じ日に声を

聞き確認したもので、国上山の植生等から考えるとノジコより多いのではないかと思う。西山町の調査や松代町での観察で印象に残っている。この時は、エゴノキの真っ白い花を見ていた時に声を聞いたもので、印象深いさえずりであった。

## ■オオジュリン

大河津分水の右岸の河口近くのアシ原には、秋にオオジュリンが渡来し、冬を越している。大河津分水の河川敷には、水田や畑などの農耕地があり、アシ原は少ない。オオジュリンが越冬するには面積的に少ないのではないかと思う。しかし、アシ原に行けば少ないながら必ず本種を見ることができ、春には、夏羽への換羽途中のものに出会うこともできる。

## ■ベニマシコ

大河津分水のアシ原では、ベニマシコも、オオジュリンと同じようにみられる。秋、堤防斜面の草地で採餌しているのを観察することができた。



ベニマシコ

## ■カワウ

大河津分水の新洗堰の上流では、本種数10羽を見ることが出来る。時々潜水して採餌したり、中州で翼を広げて羽毛を乾かしている様子を見ることも出来る。ただ、堤防上からだちょっと遠いために見にくい。昨年大河津分水記念館ができたので、この施設から観

察することもできそうだ。



カワウ

## ■カンムリカイツブリ

毎年、冬羽のカンムリカイツブリがカワウと同じ様に観察できる。今年の2月には、30羽ほどの本種を観察したが、警戒心が強いため、なかなか近寄りにくかった。しかし、少しは観察を楽しむことができる。



カンムリカイツブリ

## ■カモ類

カモ類は、カワウやカンムリカイツブリと同じ新洗堰の上流で観察できる。ここで観察できるのは、主に淡水カモ類で、マガモ、カルガモ、コガモ、オナガガモが中心である。ハクチョウ類が渡来するというので、昨年からは、分水町が猟友会等に働きかけをし、新洗堰の上流の中州から下流が5年間（本来は、10年間であるが、猟友会等の賛成が得られず、

5年間となったと聞いている。)銃猟禁止区域となった。しかし、銃猟禁止区域との境界の区域外の中州でマガモのデコイや囀ガモを使って「鳥屋撃ち」をするハンターがおり、ハンターの使用するモーターボートが区域内を走行する。このため、禁止区域内のカモ類は定着していないように見える。今シーズンも渡来はしていたのだろうが、ここでハクチョウ類を観察することはできなかった。

## ■ハクチョウ類

佐潟に渡来しているオオハクチョウが昼間、分水町佐善、熊森、燕市小池地内の水田で数10羽から300羽位の群れで採餌をしているのを観察している。燕市や分水町に渡来するのは主にコハクチョウのようである。しかし、常時渡来している訳ではない。採餌のために渡来するのみで、見られるのは少ないようだ。今冬は、2月初旬頃、雪が多く降り、餌場としての水田が雪で埋もれ、それ以降観察できなかった。3月始めの天気の良い日の朝、燕市の屋外でハクチョウの鳴き声が聞こえたので見ると、50羽位の群れが北に向け飛んでいるのを観察した。その後見ていないので、これが北帰行の最終便(?)かもしれない。私にとって、今シーズンのハクチョウ類の見納めと思っている。

おわりに

燕市と分水町の鳥を1年間のうちの数日という短い観察で、しかもデータも少ないのに皆さんにこの地域の鳥を紹介することは申し訳ないと思っている。しかし、この地域の鳥を調べたり、観察した報告はあまり見ていないので、今年は少しでもデータを蓄積をし改めて紹介したいと思っている。そのために、何をしながらでも鳥を見る時間を見つけようと思っている。それが私のストレス解消の薬だから……………。



# 寺泊探鳥会に参加して

上越市 榊 沢 修 司

2003年2月2日、在住の上越産以外との出会い（むろん鳥です）を求めて、初めて参加させて頂きました。前週まで大荒れの天気だったので半分不参加の気持ちで迎えた当日、快晴の空にあわてて車に乗り寺泊まで海岸線を走りました。海岸道路を走っていると波や風に打ち上げられた余りに多いゴミに絶句。しかし、後でお世話になったKさんから、荒天後の砂浜は珍種が打ち上げられることもあると教えられ、なるほど、物は見方で変わるものと納得。着いた寺泊も前日までに降った雪が残りながらも、キャッチフレーズの“厳冬の日本海海鳥を訪ねて”とは、幸か不幸か大外れの春の天気にも恵まれ、30人ほどの参加者で始まりました。



寺泊港内から寺泊水族博物館にかけての観察では、カイツブリの魚取りを見ることができました。当地では珍しいミミカイツブリも登場しました。ほかには日向ぼっこをするカモメ類、ウミウ達、常連さんでしょうか。その後車で出雲崎海岸に向かい、路肩に止めた車の横から、沖に浮かび羽を休めている多数のカモ類を観察。カルガモとマガモ主体で数百羽の数だったのででしょうか。アビの出現もここだったかな。

資料によると寺泊探鳥会で80年2月以来記録された種は昨年まで79種でしたが、今日80

種目が記録されました。何だったと思いますか？オオハクチョウです。水族博物館辺り上空を6羽で編隊飛行しておりました。何処から来て何処に行くのでしょうか。

さて本日の出現種は全部で29種。この中で私が識別できたのは18種でした。私にとって今月が探鳥を初めて1年の区切りになりました。1年も鳥を見てるんだから、もっと識別できなければと自分でも思うのですが簡単ではありません。マニュアルでは分布、渡り、季節、生息地、場所等々で予測が付くとか何とか書いてはありますが、姿や声、飛影でも識別してしまう皆さんに思わず尊敬の眼差しを向けてしまいます。

鳥は、オスとメス、夏羽と冬羽、幼鳥と若鳥と成鳥、さえずりと地鳴き、亜種、等々本当に悩ましい。特に時々しかお目に掛かれない鳥や冬しか来ない鳥を来期まで脳内に保存するなんて奇跡に近い。今飛び去った鳥を図鑑で探す間に、あれ？覚える途中経過の苦勞も楽しいことだと自分を励ましているが、一人前まで何十年掛かるやら。

今、私はもう一つの趣味である写真、デジカメ撮影に熱中しています。ウォッチング同様、鳥達を脅かさない様に行動したいと考えています。対象を上越市から近郊へ、県内、甲信越、そして日本の果てへと夢は勝手に広がります。日本で見られる340種？にどの位迫れるか楽しみです。また、いつか調査や保護活動にも参加できるレベルまでいけたら…。

たらと言えば最後にタラ汁のお礼を言わなければ。本当に美味しかった。今回は知らずに来てしまいましたが、来年はこちらを本命にしたいほど美味しいタラ汁をご馳走様でした。

# カナダ・バンクーバーで越冬するハクガンの大群

西蒲原郡湯東村 岡田 成 弘

カナダ太平洋岸に位置するブリティッシュコロンビア（BC）州は、北米大陸西側を縦断するロッキー山脈以西の地域で、山岳、森林地帯からフィヨルドの海域まで多様で豊かな自然環境が広がっています。ロッキー山脈の氷河を源とするフレーザー河は、市内最大の河川で、亜寒帯性の大森林地帯を通り、いくつもの川を集めながら平野部を形成し太平洋に注いでおり、初秋にはベニサケなどのサケ・マス類の大群が遡上・産卵する豊かな川として知られています。



フレーザー河河口  
サンクチュアリは左端の島に位置する

河口に形成されたバンクーバー市は、北緯50度ながら沖合いを流れる暖流のためカナダでは最も温暖な気候で、周辺を含め人口170万人を擁する大都市にもかかわらず市街地には緑が多く、背後に連なる山々、出来る限り自然のまま残してある河川や入江など豊かな自然の中で四季の移り変わりを感じることが出来る都市です。その郊外南部のデルタ地帯はその名が示すとおりかつては広大な湿地帯で、現在は住宅・農耕地などになっています。しかし、デルタ地帯の中心部に位置するバーンズ・ボグと呼ばれる大湿地は、保護のためできるだけ手をつけずに残してあるなど、自

然環境の保全にも配慮がなされています。



サンクチュアリ内の案内板

幾筋にも分かれて海に注ぐフレーザー河河口部の中で、最南端（サウスアーム）はデルタ地区の西端ラドナーに位置します。周辺には農耕地が広がり、新潟平野水田地帯にとても良く似た環境が広がっています。

稲は栽培されていませんが、穀類、ジャガイモ、シュガービートなど多種類の農作物が生産されています。四季を通じて多くの野鳥が見られ、終日採餌しているマガモの群れ、コンクリート化されていない水路沿いに低く飛ぶハイロチュウヒ、農耕地に降り立つハクトウワシ、杭や電柱の上からネズミを狙うケアシノスリ、河畔林の高木で繁殖するアカ



サンクチュアリが一望に見渡せる観察タワー



オノスリなど鳥相はとても豊かです。

このデルタ地帯の北部にウエスタムアイランド(フレーザー河河口の三角州)があり、その最端にライフェルバードサンクチュアリがあります。このサンクチュアリは北アメリカ西海岸における渡り鳥の重要な飛来地で、非営利団体BC州水鳥協会(BCWS)によって運営されています。ビジターセンター、観察小屋、バードフィーダーなどの設備が整っており、これまで250種を超える野鳥が観察されています。



サンクチュアリに隣接する農耕地を流れる水路  
自然度が高い

ハクガンの越冬地として世界的に有名で、毎年11月のピーク時には4万羽を超えるハクガンの大群が飛来します。11月以降は狩猟期になるため、群れは周辺の湿地帯やカリフォルニアなどいくつかのグループに分散しますが、3月には再び集結して数万羽の大群となり、4月に繁殖地であるロシアのウランゲル島をめざして飛去します。サンクチュアリ周辺の土地は、ハクガンの渡来時期に政府が借り上げ餌となる作物を確保しています。レンジャーの方に伺った話では、ハクガンは採ることができる全ての植物を食べているということです。2003年3月の訪問時は約24,000羽のハクガンが飛来しており、大群がサンクチュアリに隣接する農耕地で採餌していました。新潟平野で越冬するハクチョウが12,000羽ほどなので、その2倍の数がひとかたまりに群れて採餌している様子は、まさしくそこだけ雪が

積もっているようでした。



サンクチュアリに隣接する農耕地で採餌  
背後はバンクーバー市

一斉に群れ飛ぶときは甲高い鳴き声とともに空を被うほどで、生物の持つ巨大なエネルギーを感じました。観察当初は遥か遠くで群れて採餌していたのですが、小群単位で徐々に移動し、大群の先端を競うように我々観察者の方に近づいてきました。最短では15mくらいの距離まで群れが近づき、乾燥した耕地に生えている短い草をむしり取るように一生懸命食べている様子を見て、繁殖地である北極圏でコケ類を採食している様子を想像しました。群れの中には、純白の成鳥、グレーの若鳥のほかに頭部がオレンジがかった成鳥がいますが、これはバンクーバー地区で越冬した個体が採餌中に土中の鉄分が付着したもので、他地区で越冬した個体にはあまり見られないということです。(余談ですがこの話を聞き、かつて北海道北部浜頓別町クッチャロ



短い草をむしり取るように採食する



湖でハクチョウに給餌をされているYさんから伺った「北帰のために集結したハクチョウの中で、頭がサビ色になったものは新潟の鳥屋野潟から来た個体なのですぐにわかる。」という話を思い出しました。

BC州平野部は訪問の度に新潟平野と似ていると感じます。それぞれが国土の西岸に位置し、長大な河川によって形成された肥沃な大

地に湿地が点在し、豊富な農作物が生産され、多くの水鳥が北方から飛来し、彼らが越冬に必要な食物を得ることができる大きな収容力があるなど、共通点が多くあります。両地区とも将来にわたり、人、鳥ともに安心して暮らせるやさしい場所であることを願って止みません。



頭部がオレンジ色の個体はバンクーバーで  
一冬過ごしたもの



飛翔時は翼の白と黒のコントラストが目立つ



一斉に群れ飛ぶ



○月○日。久々に鳥の仲間と酒を飲んだ。「アハハ、オホホ」と笑いが絶えない。野鳥の生態を熱く語る者もいれば、珍鳥迷鳥の情報交換をする者、古き良き時代を惜しむ者、様々だ。年齢も性別も職場も出身地も異なる大人たちが、鳥の話だけで盛り上がり、皆楽しく生き生きと酔っぱらってさえずっている。今日だけは無礼講、無礼講。

「ところで、おめさん、何鳥で春だなーと感じるね？俺ア、雪割草やオオイヌノフグリが咲く頃、決まって●ジョウビタキがヒッ、ヒッとおじぎしている姿を見ると春だなーとを感じるが、おめさんは何鳥だね？」と何人かに聞いてみた。

●Tさん ウグイス

昔も今も、あのホーホケキョに勝るものはない。

●Yさん アオサギ

くちばしが赤いというか、オレンジ色の婚姻色に変わると春だなーと感じる。



アオサギ

●Wさん、Tさん カワラヒワ

なんてったって、あのジュイーン、コロコロと鳴き、蝶のように舞う飛び方に春を感じる。

●Kさん ヒバリ

そりゃーヒバリの囀りですこて。

●Wさん アオジ

河川敷の柳の上で囀るあの声。たまんな

い。

●Sさん、Wさん スズメ

春になるとスズメのチュン、チュンの声が騒がしくなり、微妙に甲高くなる。これですよ春は！

●Sさん コジュウカラ

残雪の残る早春の山で聞くフィ、フィはたまらない。

●Tさん イカルチドリ

溪流、山間の河原で水面を飛びながら鳴くイカルチドリのピウー、ピウーと澄んだ声を聞くと、もう死にそう。

●Kさん カシラダカ

北に帰るまえに群れて、囀りのような真似のできない、あのぐぜり。

●Hさん カモ(たしかオナガガモ?)

カモのH。水中で長くのびた雄のペニス。こりゃたまらん。春だ。

## 春告げ鳥は何だ？

柏崎市 小林 成光

イヤーたまげた！

十人十色、実にマニアックの奴らが多い。鳥が好きなどと言うと、昔であれば変人あつかいかも知れないが、季節を感じる心は誰にも負けない鳥きちならではの誇れる技かも知れない。

後日、他の人にも聞いてみた。ツバメの初認やカワラヒワのビーン、コロコロが多い。マニアックなところで、水田のトラクターの後ろで群れるユリカモメの黒くなった頭という人もいた。ともあれ鳥きちたちに、今年も春がやって来たようだ。



ユリカモメ

# ミニシンポ「佐潟と水鳥をめぐって」の開催を終えて

新潟市 千葉 晃

昨年11月2日(土)午後2:00~4:00、佐潟水鳥湿地センター(新潟市赤塚)を会場にして「佐潟と渡り鳥をめぐって」と題したミニシンポジウムが開催されました。急な案内で、しかもあまり広く呼びかけをしなかったため、この催し物についてご存じなかった方も多かったと思われます。紙面をお借りし、開催の趣旨や当日の様子などを簡単に書き記しておきたいと思います。

新潟市では、県内屈指の水鳥生息地である「佐潟」がラムサール条約登録湿地になったのをきっかけに環境保全やワイズ・ユースを進める努力をしています。一方、その主旨を活かすため、佐潟学術研究奨励補助金制度を設けて佐潟に関する基礎研究を振興・援助する施策も進めてきました。今回、酪農学園大学獣医学部の浅川満彦助教授がこの助成金を得、現地調査のため遠路北海道から度々新潟に来られたのを機会と捉え、「獣医学的見地から野生動物、特に水鳥をめぐる情報収集や情報交換のためネットワーク構築を試みたい」という希望に沿って関係者と相談し、開催にこぎ付けた次第です。このシンポは、野鳥や獣の寄生虫や病気に詳しい浅川先生と共同研究者で野鳥の研究者として名高い同大学のマーク・ブラジル博士のお話しをお聞きし、地元野鳥研究者や愛好家と情報交換するのがねらいでした。当日の内容は下記のプログラムをみていただければおよそ検討がつくと思います。急な案内にもかかわらず、主催者である日本鳥

類標識協会新潟グループ(代表 渡辺央氏)と共催者である新潟市環境対策課のお計らいで、会場一杯(約40名)の参加者を得て有意義な催しができました。質疑も活発に行われ、本会会員の中には終了後も自分の観察データを持ってマ・ブラジル博士と懇談する姿がみられました。この催し物を契機とし、学際分野での新たな協力が生まれつつあります。本年3月中旬新潟市の海岸林で越冬中のミヤマガラスが2~3日の間に50羽ほど集団死亡する出来事がありました。この人脈を活かし、大学研究者、地元野鳥愛好家、行政当局が連絡し円滑な対応ができ、死因究明に必要な処置をすることができました。今後ご協力をお願いする次第です。以下にプログラムを付記します。

## プログラム

挨拶 渡辺 央

- 話題1. 東アジア・極東ロシアにおけるハクチョウ類の渡りと繁殖地 M.ブラジル
- 話題2. 日本産野鳥における感染症・寄生虫症の概要 浅川満彦
- 話題3. 水原町瓢湖におけるカモ類標識調査 本間隆平
- 話題4. ラムサール登録湿地「佐潟」での標識調査 千葉 晃

発行 2003年3月31日 No.55

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 (振替口座) 00610-1-6002